

# 藤香会だより

## 令和元年年度総会が開かれました



山崎 拓 会長

今年度は従来開催してきた鳥飼八幡宮参集殿から場所を警固神社神徳殿に移して5月25日11時から開催されました。総会は昨年よりも多い6名の協賛会員を含め総数67名の出席を得て行われました。山崎会長が冒頭の挨拶で、「例年通りの藩主の法要、歴史勉強会への期待、今秋建立が予定されている姫路・官兵衛神社への訪問などのほか、会員のすそ野を広げ、充実した事業を展開できるよう藤香会を法人化したい。」と挨拶されました。

また役員は、鈴木譲二顧問 および平田善積理事の退任と新理事に松尾等氏が選出



審議する出席会員

また役員は、鈴木譲二顧問 および平田善積理事の退任と新理事に松尾等氏が選出されて、12時に終了いたしました。令和元年度の役員構成は次の通りです。

### 1. 主な決定事項

#### (1) 新役員

名誉顧問	黒田長高
会長	山崎 拓
顧問	空席
副会長	毛屋嘉明
事務局長	田島満行
事務局総務	西田経敏
研修	田中崇和
広報	天本孝久
会計	浜田泰祐
理事	原 俊樹
	森 純子
	徳永良子
	三野原信二
	栗山順子
	大島泰治
	郡 基博
	秦 紀子
	篠原カズエ
	高倉照矢

明しました。法人化について毛屋副会長から詳細な説明があり異議なく承認されました。それを反映した事業計画案、予算案も議案書通り承認されました。



警固神社・神徳殿

第27号  
令和元年7月1日発行  
発行者  
藤香会事務局  
092-724-0007  
発行責任者  
毛屋 嘉明

### 2. 卓話

#### 演題「福岡城跡のにぎわい創出」

読売新聞西部本社社長  
中井一平氏



総会終了後は読売新聞西部本社社長(本会会員)による「福岡城跡のにぎわい創出」と題しての講話がありました。

この場所ですトリートダンスを創設してにぎわいを作ってゆく事業に取り組んで行きたい。今では200万人が参加する札幌の「YOSAKOIソーラン祭り」のようなイベントに育てたいと結ばれました。

### 如水公416回御忌法要

如水公命日の3月20日、博多・崇福寺で416回御忌法要が、16代当主長高様を迎えて執り行われました。会員76名が参列しました。山崎会長は挨拶の中で、このような歴代藩主の法要を続けて、市民にも福岡の礎を築いた黒田家を知っていただくことが重要だと話されました。今回は姫路より廣峯神社の幸田宮司、曲淵禰宜様をはじめ巫女のお二人、播磨の黒田武士顕彰会会長の参列もありました。本殿での法要の後、墓所に向かい、如水公墓前の焼香を行いました。

その後、タカクラホテルに場所を移して長高様歓迎の懇親会が和やかに行われました。いっもながら長高様と会員の懇談、会員同士の交流と話が弾んでいました。

如水公法要の風景 (崇福寺)



# 忠之公の366回御忌法要

福岡藩第2代忠之公の366回忌ご法要が菩提寺である東長寺で執り行われました。長高様はじめ会員、賛助会員58名が参列しました。藤田紫雲老師の読経のなか、忠之公の菩提に順次焼香いたしました。

法要の後、同じ本堂で藤田紫雲老師は挨拶とともに福岡藩の寺社奉行と交渉を東長寺が神社・仏閣の代表として行っていた旨をお話されました。

その後2階に会場を移して、天本理事が立花平左衛門日記(嘉永4年)および「齋清公御入寺行列附」による「10代藩主齋清公のご逝去」という演題では講話を行いました。

会員との会食の場では、大音六左衛門青山の末裔である野村宗健さん、相島神宮寺住職中澤



忠之公法要で焼香する会員

慶輝さんほかの新人会員が紹介され、長高様を囲んでの懇親となりました。

長高様は帰路、中央区平尾にある6代藩主継高公が創建された宇賀神社(別名、黒田稲荷)を訪問されました。この模様は2月13日付西日本新聞に掲載されました。

## 会員クリック②



担当(報) 理事(本) 郡 基博

### 黒田官兵衛親子と郡家のつながり

天正14年、郡宗保は伊丹城主伊丹安芸守伊丹親保の3男として誕生。初め伊丹甚十郎を称した。郡兵太夫の養子となり、郡山城主となる。天正15年、播磨国飾東郡姫路にて黒田官兵衛誕生。小寺政職に仕え姫路城の城主となる。二人は織田信長に属している。官兵衛は豊臣秀吉に、宗保は荒木村重に属す。

伊丹親保は、足利義昭が將軍となり織田方として三好勢と戦い、続いて義昭が信長追討の兵をあげたとき義昭にみかたし忠誠を貫いた。これにより荒木村重は伊丹城を攻めて降参させ、城を受け取り城主となり、有岡城と改めて摂津

国を支配する。伊丹氏の一族郎党、郡氏は村重に属してその幕下にあった。村重は毛利氏と結んで信長に叛いた。官兵衛が村重説得のため有岡城に入ったところ捕らえられて城中に禁獄された。伊丹一族の加藤重徳とその妻はるは何かと懇に世話をした。はるは郡宗保の妹である。後に官兵衛は加藤重徳の次男を養子として迎え、三奈木黒田一万六千石を与えている。

宗保は有岡城に籠城していたので官兵衛と加藤重徳を通じて接触あったのではないかと思われま。あるいは、同じ織田方として旧知の仲であったと推測されます。後に官兵衛の斡旋により秀吉に仕えた。

また、次男郡次左衛門は千五百石、3男郡正太夫は千五百石で黒田長政に仕えている。

宗保は秀吉より二千石を賜って山崎の合戦、越前北ノ庄攻城に従軍し軍功を立てた。その後、秀吉に黄母衣衆に列せられた。小田原陣における軍功で千三十石を加増され三千石余となる。名護屋城では、兵船の奉行となる。慶長2年に

## ちょっとうんちく

博多部は福岡より歴史的に古く、そのため伝統的な行事が数多く残っています。その中でも「博多祇園山笠」は特に有名です。今でもそうですが、昔も多くの福岡部の人びとが練り出して見に行きました。福岡藩主や世子をはじめ家臣の人びとも例外ではありませんでした。

近世博多の政治・経済・社会・文化の動向を如実に表した「博多津要録 六十四」には延享5年6月15日に平八(6代藩主継高公の四子長経様、当時満6歳)様が山笠を見られたことが書かれています。

「平八様、山笠き仕舞候て、町々へお入込遊ばされ、ご上覧ご座候 お出は、最初の對馬小路町中で山笠を昇せ、ご上覧遊ばされ候

は従五位下に叙任。豊臣姓を賜与される。七組の黄母衣衆の番頭に列せられる。

宗保は黒田長政・有馬豊氏・寺沢広高と平生懇意にしていた。慶長5年7月、石田三成により、会津へ出陣した諸侯の妻女が人質として大阪城中に収容されることとなったので、黒田長政の家臣栗山利安に内密にこれを知らせ、黒田官兵衛親子の妻女を豊前中津に退避させた。

大坂の陣が始まると、長政は加藤嘉明の「大阪城で内通する者はいないか」問われたが、宗保には申し送ることはできるが、この者は全く城を出るつもりはないと答えている。大坂籠城中惣軍奉行、旗奉行を務めた。大坂冬の陣では真田丸の近くに布陣し、徳川家康との会見にも赴いた。大坂夏の陣では、黄母衣衆七組を率

い、天王寺方面に出役したが、大坂方の総敗軍となったため、秀頼の馬印を城中に持ち帰った。千畳敷の大床に黄母衣を納め、黒田長政より贈られた脇差で、豊臣方最初の切腹をしている。従者にこの脇差を長政に持参するよう命じた。

残らずお回わり遊ばされ、それより榎田社へお出で遊ばされ、脇能一番ご上覧遊ばされ候」と書かれ、その時の設えは藩の普請方より出し、床8面、畳8枚などは博多津で負担し、その損料銀(それにかかった費用)は定切銭(各町より徴収した税金)より支出したなどの記述がある。

また安政2年黒田播磨日記の6月6日の条にはさむらいが馬で乗り入れるため、山笠の者が難渋しているの、どうかしてほし、いと年行司より藩の町奉行に申し出、さらに大目付へ伝えたことなども記述されている。

徳川家康は宗保が節義をまもり、諸人に先立ち切腹したことを聞き「昔、鎌倉の安藤入道、今は郡宗保。同じ忠節の家臣である。」と称賛した。黒田長政は家康に宗保の配慮により妻女が救われたことを報告し、宗保の4男利宗、6男左内(早世)の助命が許された。長政に従い、堺より筑前へ下向した。

元和4年、利宗は十八歳で元服し知行千石をあたえられた。島原の乱での軍功で三百石、後に二百石加増された。長崎奉行の番頭、鉄砲の大頭で千挺の先手を務めた。後に金石衛門と改めた。

伊丹一族の郡家、加藤家、三奈木黒田家、伊丹家は明治まで黒田家に仕えた。